

に、
 一、千石 戸田靱負 本國三河
 一、貳千石 蜂岡伊賀 本國若狹

右の如く記載せられたり。蜂岡伊賀は本多氏の家老役なれば、戸田靱負もそのかみ家老席へ加勤せしにやといへり。おもふに、本國三河とあるにても、戸田左門の胤子にあらざる事いぢるし。

○藩士戸田靱負傳

靱負が祖は、彌五左衛門方邦と云ひ、利常卿被召抱、家祿三百五十石賜はり、使番を命ぜられ、後足輕頭を勤め、正保三年歿す。妻は前田慶次殿の第二女にて、二男二女を生む。長男七郎兵衛家を繼ぎて、遺知を賜ふ。次男伊右衛門兄の嗣子となり、家督を相續すといへども、故ありて跡斷絶す。長女は長谷川安入の妻となり、次女は今井と稱し、年寄女中となりたり。長谷川安入の三男小源太、今井の猶子となり、三百石を賜ふ處、早世す。依りて津田宗七郎の次男をば重ねて今井の猶子となし、戸田靱負方徳と名乗り、養兄小源太の遺知を賜はり、後加恩ありて七百石賜は

り、寄合組と成り、持弓足輕頭・馬廻頭を勤め、寛保二年に六十九歳にて歿す。其の子齋官方副家を繼ぎ、遺知七百石を賜はり、持筒足輕頭・魚津在任組頭並となり、安永二年馬廻組頭に昇進し、名を靱負と稱し、後治兵衛と改稱し、安永七年六十一歳にて歿す。曾孫方直も靱負と稱すとぞ。元祖靱負は稱美すべき事もなかりしかど、戸田靱負の名に據りて、その履歷を爰に載す。

○篠井雅樂助傳

其の地上本多町今の横山陸平邸地の横町南側也。篠井は世々本多氏の家老にて、元祖安房守政重以來の家士也。元和二年十二月政重より書出せる家人武功調書に、千石歳廿五篠井雅樂助、本國越後、於大坂五月七日之仕合、如下知組之侍共堀田圖書丸に爲乘、何茂手に合候。雅樂助手前之様子は、青木頼母・舟喜治部左衛門一所に罷有可存事と載せたり。本多家記に云ふ。二代安房守政長、正保四年家督相續之處、未だ幼少に付、爲後見家老之内千石篠井雅樂助、六百石松田助左衛門兩人與力に被仰付。依之慶安元年家祿之證書判物賜之處、五萬石内千六百石與力知与載

被下、同三年篠井・松田兩人、松雲公御在江戸に付、微妙公より判物被成下。但松田助左衛門は明暦元年に病死、篠井雅樂助は寛文四年に病死に而、其子共は與力に不被仰付也。とあり。按ずるに、寛文元年の士帳に、本多安房五萬石内千六百石與力と載せたり。此の頃いまだ兩人共に與力の名儀にて居たりし故也。然らば寛文四年篠井死後與力士の名稱絶えたるなるべし。

○鞍掛楓

此の木は、篠井氏舊邸の地内にありて、往來土塀際なる古木是なり。昔此の木に鞍掛り居たり。故に鞍掛楓と呼べり。此の木は天狗の住所也ともいへり。最前篠井氏此の木の枝を卸させけるに、其の杣人木より落ちて死せり。故に夫れより恐怖して、伐木の事を禁ぜりとぞ。

○篠井氏天狗傳話

舊傳に云ふ。昔篠井氏に召仕はれたる若黨あり。此の者天狗に化生せんとて、部屋へ入り常に祈念しけるに、或日部屋に籠り居ける處、部屋より眞黒なる煙出でたり。人々驚き走せ行き見るに、戸口は内より縮り致し有るゆゑ、如何

して出でたりけん、其の者居らず。僅に窓の紙破れ居たるのみ也。然るに其の後篠井氏夢中に彼の若黨來り、奉公中懇意に仕はれし禮を述べ、せめての御禮に奉るとて、鞍と守りとを指出し、此の守は若し天狗にさらはれたる者ある時、携へ求むれば、必ず出づるなり。但し七代迄の守り也。若し七代を過ぐれば、その靈驗なきよしをいうて立去りたりと也。夢さめけるに、守りは即ち枕邊にあり。鞍は露地の楓に掛かれり。右守りは箱に納め封緘してあるがゆゑに、如何なるものか詳かならず。鞍は鐵にて造りたるなりといひ傳へたり。依りて従前は金澤市中に子供など天狗にとらはれたりとて、親族共尋ねに出づる時は、必ず篠井氏より彼の守りを乞請け、是を携へ尋ねけるに、果して出でけりとぞ。右守りは七代迄の靈驗にて、夫れより後は靈異なきとの事なりしが、今源吾といふ人にて既に七代に及べり。然るに明治維新の後は天狗にとらはるといふ事絶えたり。是も不思議なる事也といへり。按ずるに、天狗てふものは、日本紀に、舒明天皇九年春二月丙辰朔戊寅、大星從東流西。便有音似雷云々。僧長僧曰。非流星是天狗也。其